

学生が見る「地域の優良企業」 ～武州工業株式会社～

多摩大学 経営情報学部

入澤 凜（2年）・工藤 夏実（2年）

「国内生産」にこだわる企業

武州工業株式会社は1952年に武蔵村山市に設立された板金工場からスタートした製造業の会社である。国内で行えるモノづくりで、海外に負けないコストパフォーマンスのよさを目指し、日々新たな開発に取り組んでいる。

専門分野は一言でいえば「パイプを曲げる」というものであり、ものづくりに詳しくない身から見れば「それで？」と誤ってしまいそうなものだが、この技術は自動車の部品製造やその他の機械などで応用されており、その技術力の高さは医療業界にも用いられるほどである。また、2015年に経営部門である多摩グリーン賞「最優秀賞」、2016年には技術部門である多摩ブルー賞「技術・製品部門」で「優秀賞・特別賞」を受賞するなど、経営・技術両面で優れた業績を残している。



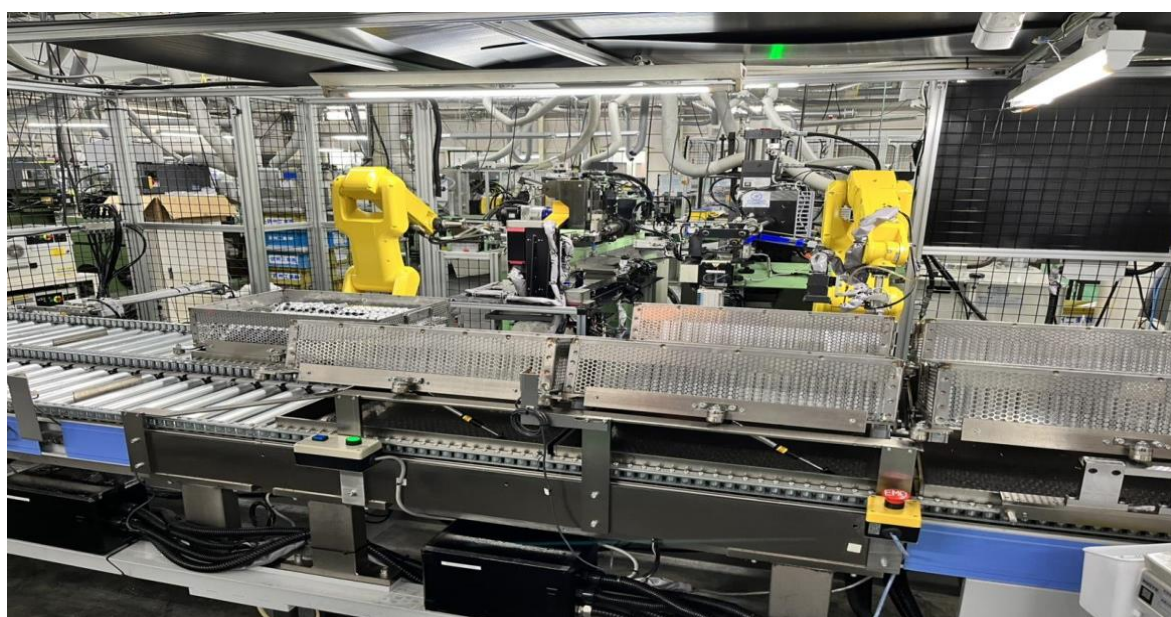
（武州工業株式会社総務部の宮川さん）

誰でもできるモノづくり

武州工業の経営理念には現相談役の林英夫さんの考え方が経営面、モノづくりに大きく影響している。モノづくりにおいては「日本の製造業を守る企業」として、海外に拠点をつくらず、すべて国内で生産することで地域の雇用を守り続け50年以上も黒字経営を続けている。

武州工業では、「誰でもできるモノづくり」をコンセプトに、性別や年齢に捉われることなく、社員一人一人が技術を身に付けるための様々な工夫がある。その一つに、自社開発設備というものがある。社内で使用する設備を自社で製作することで、作業目的に合った環境を整え、コスト削減や作業効率のアップにつながっている。

工業において命とも呼べる製品の点検作業には、「BIMMS」と呼ばれる自社開発のスマホアプリを使っている。常に更新され続ける生産状況をタブレット端末で見ながら社内のデータ取得・問題発見・改善を行い、ミスを減らした上で、問題があった製品は一つ一つ手作業で確認や修正を行う。このようにIoTを利用することで、社員への負担を減らすのと同時に、納期短縮やコスト低減など無駄のない生産を実現している。



それに加え「1個流し生産」と呼ばれる一人の技術者が材料調達、加工、納期管理までの全工程を一貫して行う生産体制や、自社開発のアプリである「生産性見え太君」といった個人の作業を見直すアプリを活用することで、武州工業では未経験の人でも職人のレベルまで成長することができる。一人一人が職人だからこそ、全ての作業において、互いに助け合うことができるといったメリットもある。

また、この「1個流し生産」は少量多品種の注文に対して迅速に高品質なモノを提供することを可能にしている。このように効率の良い生産システムがあることが、国際競争にも負けることなく、日本のモノづくりをけん引し続けている理由である。



モノづくりだけじゃない、自分らしく働く工夫

ただ、武州工業の強みは決してモノづくりだけではない。このモノづくりを支える「組織経営」にあると考えている。

この企業はSDGsが2015年に国連で採択される4年前からその内容に類する物事に取り組んでおり、その根本には「地域の雇用を守りたい」という思いがあるからだろう。その一環としてもっとも特徴的といえるのが、「8.20体制」ではないだろうか。その内容は1日8時間労働で1ヶ月20日間勤務を原則とするものである。この体制のメリットはなんといってもプライ

ベートと仕事の両立が行えるという点にある。それだけでなく結婚できる若者を増やしたい、若者の明るい未来を守りたいということから育休が取りやすいことはもちろん、「配偶者手当（相手がいる限り手当が出る）」というユニークな制度も存在している。

上記のような制度のおかげで社員の平均年齢が35歳と非常に若く、若手社員が多く活躍していることがわかる。これは一般的な上層部による一方的な採用形式ではなく、その部署で実際にはたらく社員たちが、共に仕事をしたいと思える人をチーム側から採用するという方式を用いることで、社員のミスマッチを最小限に抑えていることが関係しているといえる。

また、決まった部署以外の仕事も行えるようにどの社員も教育を受け、お互いに助けあうのが当たり前の環境だからなのか部署の垣根も低く、社内でのコミュニケーションが活発であることも特色の一つである。

他にも労働時間の多寡に関わらず全員を正社員と扱ったり、女性が定年まで働けるように雇用体制を工夫したりという取り組みを認められ、2017年には「日本でいちばん大切にしたい会社大賞」で審査委員会特別賞を受賞している。



これからの製造業を示すモデル

武州工業は会社のあるべき姿を追求し続け常に変化している企業である。生産性を上げるために試行錯誤した末たどり着いた「1個流し生産」や、時代の変化を見越した「8.20体制」や女性に優しい職場環境など、会社としての理想の姿を確実にとらえていたのはまさに先見の明があるといえる。

実現した理由の一つに、長い時間をかけ丁寧に築き上げた柔軟な社内環境があると考えられる。だからこそ、トップだけでなく社員も一丸となった一つのチームとして会社を良くしようとする謙虚な姿勢こそが、武州工業を大きく成長させた。それが結果として会社だけでなく社会の利益にも繋がっているのではないか。武州工業が長きにわたり日本の製造業の最前線を走り続けている理由はそこにあると考える。

製造業が衰退の一途をたどっている中で、国内生産で利益を上げるだけでなく、様々な取り組みで社員に優しいだけでなく、地域を思い地域活性化に大きく貢献している武州工業は、日本の製造業に関わる全ての企業において、一つのモデルケースであるといえる。



取材の感想

自社の利益よりも社会の利益を目標に、よりよい社会を実現するためにモノづくりで世の中の課題に挑戦している姿勢や日本のモノづくりを守るために信念をもって取り組んでいる姿にはとても情熱を感じ、今後の製造業だけでなく、日本企業のあるべき姿を見た。

一般的に「製造業」はネガティブな印象を持たれがちだと思う。しかし、今回武州工業を訪問して感じたのは真逆の印象だった。地域や製造業を盛り上げようと本気で取り組み、社員にとっても良い環境で在ろうとする姿勢がとても伝わった。今回このような機会を訪問させていただいたのはとても良い経験になった。（入澤）

直接の取材を通して会社の組織体制を生で知ることができたのは貴重な体験だったと思う。このような組織運営を行っているからなのか、今回取材をした社員の方々も会社の素晴らしさを楽しそうに語っており、よい社長とよい社員に恵まれている企業なのだと感じた。（工藤）